難波
うねめ
千手
そとは小町
舟弁慶

二

難波

第
山も霞て浦の波ゞ浪風静
ありきかな
詞 抑是ハ當今につかへ奉る臣下也我三熊野を信し
毎年として参り仕候此度ハ所願
成就し年の数ゟも成之ハ唯
今都へ下向仕候
春立や

ものとけさうさあきさのゞく湊の
生殊も吹上の浦伝ひして行程に
ゆくも紀路の関越て是も都の
津の国の難波の里に着にけり

一セイ「君が代のながらの橋もつくるなり
難波の春も幾久し 「雪とあえし梅乃
冬籠りとは云へど春への気色かな 「地 天

長く地久数なく神代の風長閑に
つたはり皇乃かしこき御代乃道ひ
ろく国をおさめ民を撫て四方に治る
八嶋の浪静に照日の本の影ゆたか
成時とかや春日野にわかれ摘つ
萬代を祝ふある四方の春あるき皇を
あふぐ心かまつりごと乃は調和

ぞこそちまさるや敷島の直なる御代を
あふぐも辨へ行てちまたと迄あ
まゝ照日影のどけく　ワキ詞いかに
是成老人に尋ぬべき事の候　シテ詞此
方の事にて候か何事にて候ぞ
ワキかほどや諸末社多き中にも是成
梅の木陰を立よりて陰を清め

賞翫し給ふ事不審也若此梅は名
木にて候か　シテ詞御姿を見まれば都
乃人なるがさ程此飛梅の謂を
しろし召さぬ事ある梅花をも御覧じて名
木かとの御尋は心なきやうなれ人
尤大方の春の花なれども盛りは多き
き花の中に先始あれば梅花を花

乃花ともいへり　（シテ詞）其上梅の名高く
國ゝ所ハ多けれども六義乃始のうた
哥にも難波乃梅こそ讀まれ
御代もひらきし栄花といひ　（シテ詞）あはれ
数さき花の佳例と云ともかくまでも
乃國豊でやすやてもちれ難波つよぎらを
えこく咲や此花と名木まとのあはれ

事あふてしきは法獄ト　（ワキ詞）之難波
の梅乃事外末と寿しゆへ遠く
成まる向ゝらあ哉ハうたるも難
波つよ咲や此花冬籠今を春へと
と咲やこ乃花の春をかざしてよめる
哥乃心まのあるぞ　（シテ詞）ゆ代祐帝
をうへ哥乃心詞を顯を難波

乃御子ハ皇子なから未位に即き給
はて此ハ冬咲梅乃花のごとし ワキ詞「御即位
ありて難波の君乃位に備り給ひし
時 シテ詞「今折時乃花のごとく ワキ上「天下ハ
春をまつりごちきハ シテ中「いまハ春へと咲や此
花の盛ハおほさゝき乃 シテ「帝をも花に
喩へ奉り ワキ「風も治まり シテ「立波も

上ゲ哥「難波津に咲やこの花冬こもりく
今は春へに匂ひきてふかきた梅の風
枝をならさぬみよなれや難波津の國
のどかよハ乃るにも豊なる世の
例しこそ實に廣き治めなれ
クリ地「抑難波の帝ハ帝乃御始ゞ
山乃宮ぢハごまれハかりるきぞあり

シテサシ「それ唐國の堯舜の御代もことゝ
萬機のまつりことをすなをにかよ
はせて慈悲の浪四海に普くおさめさ
せおさまりたる御代也「君は舟臣は水
水よく船をうかむるとかや高き屋
にのぼりてみれは煙立つ民のかまど
はにぎはひにけりと叡慮にかけし海

名もかはらぬゆゑきこえし聖主
は此君の代をはためしをひくなりも
實も賢き御ことのり國とおさまれは
三年の租調をゆるし給ひし其年月も
極まれは濱の真砂の数つもり
て豊年はせ調物ゆたかに数々や
あつくいやましにまさるは寶の貢

秋萬歳乃ちはこの玉をたてまつる
絶えハ善き御心のはくして深ふ
して鳴乃声まて浪をわくしろ
ミ御恵ミ華は山乃すそよりも出
さきは歌ハ大君乃國あまきハ去年末
も榮へさかゆる津乃國の難波の梅
乃名ふし打寄ひも四方ニ善く一
花ひらけれハ天下皆春なれや万代
乃科を安全とうめてゝさき萬
世乃春なれ花ッく栄へ久しきあすは
はの昔語をそ面白き　シテ上　宮人あまし
あふ難波津より鳥乃一聲打しきま
鳴鶯乃声の曲春鶯囀をそうさん
地上　不思議やちら方ニ舞楽あれハかく心有花

のきよく舞楽をそうし給ふべき
秋ハ知らずや此梅の去年〳〵の花の
精 〔地〕と一人の老人ハ今そ顕はす
難波津よ咲やこの花と詠しつゝ位を
すゝめ申せし百済国の王仁なりや
どきも此されは勳きそ〳〵鶯の声
ゐて去の鶯の舞の曲をもよほし

慰めやへしや声をかしけて御法をさへ花の
声さみしよ侍らん 〔シテ〕年寄て若もんく
花の声さみし更召夜乃〳〵月影
ともに同なる氣をよそみて音楽の
花よゝゆるふしきけれよく 〔シテ〕誰か
いひし老の身は東よりすれかいへ
た南枝花初て開く家八所も西の海

向ふ難波乃春の夜の月雪もまた
浦乃浪よるれかくハ面白やこゝも
志るしなるよ　是ハ難波乃浦
に年をへてひさしき代々の恵みを
受る此花咲やひめの神霊なり
シテ　我も亦百済國より此國に渡り君
を仰ぐ國を守る王仁といへる相人
なり　仁徳乃御宇ハ御代
の鏡乃影をうつし治まる御代の栄花
をなしゝも此花の句ひまさるハ開くる
ことの葉乃みちよるも難波のうたの法なる
上　めでたき鼓まうさめ舞楽のこゑもしるらんや
梅枝よき春鶯囀まひもあり
雪ハふるき袍乃君もせそうちあり　あまきたれ

もくへもあまれは君か代よかきて
鼓も時乃ねかうして鐘
波乃鐘も響き浦ちうしほの
浪乃音して入江に松風村
あしの葉をと山つまをゆきしよろ
ちひろの世にて若しけ鶴波乃鳥も
おもろねは代ある音かなやゆう

たえろ乃音楽や時乃調子よかる
とりぐに管絃乃声をハ春風空
そろ〳〵芸よ花ともしてそよ〳〵とう
秋風楽ハめつらしやあきの風そろ
若よ浪をひうしとう〳〵う萬歳
楽ゑよろつう青海波ゆくは
あ細海のあまたちくうへは桜葉君

地 楼頭の曲ハ ゆうゆうつ 入日を招き
それ手よりも水の太鼓ハ浪あれも
よりてハうらかやりくハうら沈音
楽よひらきつゞ人 萬代まで出天下を
守りたまふ山る 天下を守る治る萬
歳楽うれそつさく

兼平

ワキ 旅の衣を信濃路や 木曽の
行方を尋ねん 「是ハ木曽の山家
より出たる僧にて候 扨も木曽殿ハ
江州粟津の原にて果給ひたる由
承り及び候程に彼跡を弔ひ申さうやと
存じ候 只今粟津の原へと急候

信濃路やきそ乃かけ橋名のみして
うき其跡とふや道の辺乃草の陰
のかり枕おも重ねつ日も添てゆ
きハ程なく近江路や矢橋の浦に着
にけり〳〵
一セイ シテ 世業のうきを
身につむ柴舟やたかぬさきよりこかるらん
ワキ 渡し守其舟に便船申さう
シテ なふ是ハ山田矢橋の渡し舟にて
もなし渡しならぬ柴積たる舟にて候
へば便船叶ひ候まし ワキ こなたも柴舟
と見申てこそ折節渡りに舟にてもあ
れ其上出家の身にて只人ハ別の御利益に舟
を渡してたび候へ シテ げにも出家の御
事なれハよの人には替り給ふへし

經をもし如渡得給　身にかへさる橋なり
のかれ　かれよりも近江の海の
長橋を渡る身なれバ、たれかは人の渡り
身也　是ハまこと浮世をわたる渡身
のかく　手されぬ袖をも引き掉れ
まよふ人なれと法の人にてまよひきを
給をはいりて悟りをもくいめされ

なく　如何に弘頭殿よりもきこしめせ
みしく渡りつる浦山ハ皆名所にてそうろ
作ら山ハ比叡　さなからも皆名所にてはん
ものの事を教へ申へし　先あれ向ひに当て
大山の峯てはハ比叡山なり　はしにあ
きたは比叡山にて候　麓に山王二十一社
ちきりたる峯ハ八王寺　坂本

乃人家を遠離してハ　梅若乃
比叡山ハ王城よりうし寅に當つてハ
よる事　中くの事ちか我山ハ王城
乃鬼門を守り悪魔を払のこなれハ
一仏乗乃峯と申ハ靈鷲の高山を
かたどれりよ天台山を号せるハ震旦の
四明の洞をうつされ　傳教大師桓武

天王と心をひとつにして延暦年
中乃御草創我たつ杣と詠じ給ひ
し根本中堂乃山上遠離れみて
て候　梅若大宮乃御在所ちかとの
とかりんもとの坂本れうちまて候
けふぎよん麓よ當つておしさがき陰
のみてハ払大宮の御社前も殿

みて法入之　有難や一切衆生悉有
仏性如来と此時ハ我等か身とも頼もし
き法之　作のことく佛衆生通
まろ身なれハ我僧も我も隔あらし
一仏乗の　峯のきさやまの梢を
あらし　雜よ止観の海をたたへ
亦戒定恵の三学をこそ　三塔と

あつけ人こゝまで　一念三千の機
を顕して三千人の衆徒をこそ圓
融の法も曇なき　朝月の横川をみし
賀りや揖文麗ハ住り波やさ志賀辛崎の
乃一松七社の神興の精成へ
しかり浪のまなれハ棹さかまきゆく舟も
遠のかしに向ひのうら浪紫雲の

森寂しく成て弦ハ音きれ時の首
あつらし山桜ハ青葉にて面影も夏
山のうつりゆくや青海の紫弘のまべく
も暇も情き時もあるへきよく
儀きりの霊津草くるまよりく
露をも片数草遥く日も暮ゆり
も成りハ霊津の原乃起れ世のおもき

陰いざや帰らんく　白妙ほの
を研ぎ音し眼睛をやかつ紅波たそ
を流をようへかひ箙よ梅花をさしを
雲吹の霊津の原乃卵風よ　ときつ
しりその聲しよ　修羅のちあたる
ざいけや　かきや霊津の原乃
草枕よ甲冑を筆しみつ給ふきめ

成人にてましますぞ　シテ詞 おろかと尋

給ふ物かな御身ハ是迄来り給ふも我故

跡をとはん為のはし指にてましま

さんや兼平身是迄まいりたり　ワキ詞 一ことに

其身即兼平が今ハ浮世になき人なり

猶も夢にて有らん　シテ詞 いや今みる夢

のうちぞ現にもちやうどあまた棹の舟の

見えしものを早くも忘れ給ひつるや

さや舟にて見えしとハ矢橋の浦の渡

守の　シテ詞 其船人こそ兼平が現はれて

見えし姿なれ　ワキ詞 さてハ弘ふよりわが様なる

人とみえつるが棹は流れ舟人ハ

おもあらぬ　シテ 漁夫にも　あらぬ武

士の矢橋の浦の渡し守矢橋の浦

れ渡し守とみえしハ我等か同數
なる此舟をも法乃舟よしとて我をもま
た彼岸にわたしてたばせ給ふや
なゝや有為生死のちまたに来つてまよふ
心も若おもひつゝく前後不同夢幻泡
影なりけり　唯是槿花一日の栄
弓馬乃家に生まれ来て目の前のあたり
兵乃七騎と成し木曽殿ハ此近江
路に下り給ふ　兼平瀬田よりまいりあ
ひて又三百余騎に成ぬ　そのうち合
戦にうちまけてハ主従二騎になりぬ
さて今ハ力なしあの松原に落ゆきて
御腹召れよと兼平すゝめ申せば心
ぼそくも主従二騎粟津乃松原さ

して落給ふ　兼平やう〳〵傍より
御敵大勢にて追かゝり候　防矢仕らん
とて駒の手綱を返さんとすれば木曽殿御覧じ
多くの敵をものがれしも
一所にて死なんと思ひつる故
とて打つれ給へば兼平承り
殿は日頃は音に聞くらん木曽殿

れバ人手にかゝり給はゞ末代の御
瑕瑾なれば自害有へしと申しやうて
手綱とつて兼平はいさめられ又ひつ返せ
し落給ふ　勢をはなれ木曽殿ハ只ほそ
道もなく一騎粟津の原さしてあゆま
なる松原さして落給ふ　比は睦月
の末つかた雲めさはあつゝ寒うつりば薄氷

の山風乃雲ゆく空もくれはとりあや
しや通路乃末も雪のうすき氷深田
に馬をかけおとしひけどもあがらずうて
もゆかぬ望月乃駒のかしらも見えて
こはそも何とならん身乃果せん方を
なくあきれはてゝ此まゝ自害をせんや
とて刀ぬき手を掛給ひしかさるまでも

兼平が行方おぼつかなしと後の方を見かへり
給へハいつくより来りけん今
ら命ハつさ弓の矢一つ来つてうち甲
ふかくといれつゝ手にてましませハ
たまりもあへず馬上よりかつはと落つる乃
ありある所ハ寂そ我よやとも主君の
御首を給はりてきらひ給へ
痛

りき物語兼平乃御家朝臣に行ける
おらふ鈴ひきる 兼平かくれども
老て戦ふ兵隊ふもだ宗鈴の御伝を
心よからくるりあり 御ならば思ひは
も敵乃方よ色立て 木曾はうされ
鈴ひ去て よりつれ声をのよふ
今い行やる郡とへきて 思ひ定て兼

平も 是そ家郎の暮言と 鐙ふん
あり 大音あけ木曾殿の御内よ
今井乃四郎兼平と名のりかきそ
大勢よかつくいまぞ本より 譜當
千乃秘術を顕し大勢を蹴ば乃行
まのあら儀うつ良れまうりきり
数手十文字よ打破りかき通つて其

ねば自害乃手本よとて太刀をふくみ
つゝさかさまにおちてつらぬかれうせにけり
かねひらが最後乃しぎ目を
おどろかすありさまかな

千手

是ハ鎌倉殿乃御内に狩野介宗
茂にて候扨も相国乃御子重衡卿を
此度一谷乃合戦にて生捕給ひて
東へ下りて候朝敵乃御事とは申なか
ら頼朝痛はしく思召れていつくしう
もてなし申せとの御事にて昨日も手越の

まへをつかハされてハ彼千手の前とや
らんハ手越乃長かむすめにてかゆうにや
さしくはそてば才あつかれれはを
遣ハされつるが誠よりの様き心はしよ
て庭ゆどを白ハ又雨中寺つましく
酒をくみあやさひやと夜も琵琶琴の音
うへをさとつゝむ身もやあらまや

サシ
晩鐘　それ雲乃花の樹頭よりハ
秋の月の水底に沈むもさこそあれ
さのみ様をみても是や重衡のすゑ
古へハ雲乃上かまてもまゐりぬる身の
ゆく思ひよりたらひ毎ようさばかりや
下哥
いまのよるそ都まて有様や
都よりたのもしきぬは涙あるを痛り

上歌 陸奥乃忍ぶに堪ぬ夜の白らく
降もさだひさる折しも思ひ乃露
も散るに心は花もあはしとぞまる
袖の色まさるもぎの夕乃だゝひ
うれしく めづらに筆門しまん 詳
みて濡りけり千手乃前のしまりける
世をたちはりの背き候へば機嫣を

まつたやらそるとてん 司は是樓
花一日乃栄ぞ命は蜉蝣乃定めなきに似
たりぞ心も猶武ゆ胡蝶に誘はれ岩窟
乃内にこめられて鳥道をもとめ心きつ
ぞ忠も思ふかりとしそて敵をそう
舊里に帰るぞ我は修と敵陣をさめる
わたくしは命乃責をそろぞざまへしきる

しや限りあらんあら定めなやばいふ
やよ千手千手ハまいりて　只今
ハ何れ為にてばよしく何ゆゑも
あまぎみの對面ハかなふまじきとや　へ
去くバかつてまいれバまいりし由やて候
何と思ふに少将殿の御對面ハ叶ふ
まじき由仰出されさふらふ　女　是も私よ

あるまじ頼朝よりの御諚にて琵琶琴を
まいらせてまいりたり此由かさねて御
申入　御諚の趣やて候ハゞ是も
私よあるまじく頼朝よりの御諚にて琵琶
琴持せてまいりたりよしくハ惜ハ去
女　ゆあわれ共ばてあるべしと承それ
其時千手立よりて　妻戸をきりゝ

と押ひらくみすの追風匂ひくる花
の都人に恥かしながら見えんや
東の果迄も人の心は奥深き其情は
都なれ花の春紅葉の秋だに思ひそと
ありぬ読ん いかに千手の前白地
よそつる出家乃御暇の事を申候ほ
頼朝は其由申てくれ候へと

敵はいかで私として出家を許すや
さりとは思ひもよらぬとひつきけり
わが心の内押切りまいらせてめや
強く候とてひくき出家
は望み候ひつ給へ 口惜や我一
答みていかでか叶ふべき身乃生捕き
べひ東乃果迄もがの様に面をさらし

然とも前世乃報ひと云なから又異
まも定命より仏像を云し人寿
をたもちし現當の罪を果しや前業
より起るつらうさ払へ 宿世ハ
悟り去なからんか 今は古へ今ハよ
多きみひとあと獨りれ数自
そとよ 定よく慰めあへ古類ひハ

あしきみの果 かりかは歎の花と栄へ
日は東に出てまきて うつり替はる
身の程を 思へば世は空蝉乃唐
衣きつつ 別れし妻しある都
乃雲井を立ちれきぬる遥々の旅を
しぞ思ふ 嚢へのうきこの果て出し
水ゆく川の八橋やくもでに物を

思へど気がきぬ情の中にも別るゝや恨成
涙ぐく百の雨中の夕の空に浮
つきぐくを慰めんと杯を抱きてしま
つ既酒宴を始めんとて「千手ニ手まし此
由みるよりも御酌にたて重衡の御
前によりてしまりきれ「とさいにしろ
勝りの心あらねは思ハねども手まづさへ

きる盃心ならずも思ひ思ひ「去へ
いかに何なりとも御肴にとまうせは
「其時千手とりあへず羅綺の重衣
たる情なきことをきふにねたむ
笑ふ詠じ給ふ朗詠ハ天神あらゝも北野
乃御作にて此詩を詠ぜん人をは一日に三度守る
べしとの御誓あり「去ながら重衡ハ今

生の望なし唯来世の便こそきかまほ
しけれと宣へハかうハ信を取り十悪と
いふとも引摂もらし　朗詠まてそおそ
きゝ　抑も此重衡ハ相国の末の法
子とハ申せと兄弟の中にも勝れ一門をも
去て父母の寵愛限なし　ながき
時うつり平家の運命尽く月の夜ぞかし
旅色そぬ身ととらハれの津國の生
田の河よりも身を捨て　かきき戦ひとせ
しも　森の末の望の露も
されきれ　きぬらうに討れあまき　夜ハ梓弓
より力なし　重衡もびんとまちるよい
つかつもあうを首ることとしみさくの
それ魚たる網鯉の生さられつるあり

てうぢやうたる門の真まくよかぜ
つミある身としてげにかゝるを門出
ろのゞ重房が手に渡り心乃外の都出り
うきや世の中ハげにめぐりあはれ昔の月
けふ逢坂をこえ大津坂や鏡の二手よわ
うりあれどもかくても身はますかゞミ
倉よ濃き衰ハ尽くそ八橋の雲
井れ都ハいつか三河の国や遠江
あづま路の箱根の山もすぎて明けぬやを
らん星月夜ぶ鎌倉の山よ入りぬれば
ぐさ浪りうき思ひよわすれハ家
重衡のひねよ気昔を書乃燈
朧夜して私行にしるあんゝ雨さえ
あさまる枕の四面よ楚歌の声

うち行ともそれはまひの袖の色み
やさしき流れをうつして回ひも置れたる
え乃枝くたよ花さく千手の袖あら
はかさねらくいゆやうへきん長きめや
一樹の陰や一河の流みな是他
生の縁といふぞあら拍子をそ跳ひきる
其時志きひら興よ乗しく琵琶

をとしよ珍宝うし絵をもまし海
その緒合よ合まてきけ人峯
乃松風ひゞきまりて琴を枕のみ
ちよりたちねは夢も須あくちの
めぐりほのくと明わたる空の声あさ
海士やかゝきやあさまよやありな
もとて酒宴をやめ給ふも人乃うらう

痛はしさ かくて重衡卿はようやく
又都へとて上るはその守護し出
給へば 千手も泣々出行けしく
のうき契りぞや きぬ〳〵よしなき
袖もしく乃露あふこそ重衡の方
枕めもあてゝきぬ〳〵きざり

次第

卒都婆小町

山は浅きにかくれがの〳〵 深きや
心なるらん 是は高野山より出で
たる僧にて候 我此度都にのぼら
ばやと思ひ候 サシ 夫前仏既に去り
後佛はいまだ世に出ず 夢の中間に
生れきて何を現と思ふべき たま〳〵

夫難は人身をうけながら逢難き如来れ
仏教にあひながら悪にすゝむの
種なるを思ふ心もなくある空の夜に
我ちかひして生れぬ先ぞ是とし
きはゞく嫌もなきあやをもなし親乃
なきれは我為よぞろをとしる子を
あしみ子宝をと行もさまし野より

山に消るわれ是ぞまことの栖なるらん
次第 我は浮草をさそふ水くあらばこそ
出しかりきれとれや定いふ人ぞきう
まんきつともそれかつら翡翠れ簪
なほさき嬋娟にて楊柳乃雲の風に
あひくらとして鶯舌の囀りは露を
含めるいと萩のかごとりよ数そもる

ちかよりも猶めづらしや されば民間しづ
のめにさへきたなまれ諸人に恥をさらし
嬉しからぬ月日身につもつて百年の
姥となりて候 都は人目つゝましや
もしやそれかと夕まぐれ 月諸共に
出てゆく 雲居百敷や大内山
の山守もかゝるうき身はよもとがめじ
こがくれてよしなや 鳥羽の恋塚秋の
山 月のかつらの河舟こぎゆく人は
誰やらん 余りにくるしう候程に是
なる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候
なうはや日の暮て候 道をいそがうずるにて候
いかにこれなる乞食の腰かけたるは
正しく卒都婆にて候 教化してのき候へ

ましましてげに〳〵是ハ乞丐人なるが
腰かけたるハかたじけなくも仏躰色
性のうへにてハなきかそこ立のき
てよの所にやすみ候へ　シテ 仏躰色性
のかたじけなきとハ宣へども是ほどによ
字もみえずきざめる像もなし唯朽
木とこそ見えたれ　ワキ 縦深山の朽木な
りとも花咲し木ハかくれなしいはんや
仏躰にきざめる木なとかしるしのなかる
べき　シテ 我も賤しき埋木なれども心の花
のまだあれバ手向になどかならざらん
扨仏躰たるべき謂ハ　ワキ 夫そとばハ
金剛薩埵かりに出生して三摩耶
形を行ひ給ふ　シテ 行ひなせる形ハいかに

地水火風空を　五体五輪ハ人の躰
何しに隔あるへきそ　像ハそれに替らす
心功徳ハ替るへし　猶さりなから
そとはとハいかに　一見卒都婆永離
三悪道　一念発起菩提心それもい
かてかおとるへき　菩提心あらハなと
浮世をハいとハぬそ　姿か世をもいとふと
も心こそいとへ　心なき身なれハ社
仏躰をハ知らさりけめ　仏体と知
れハこそそとはにハちかつきたれ
さらハなと礼をハなさてしきたるそ
とてもふしたる此卒都婆我もやすむハ
くるしいか　それハ順縁にはつれたり
逆縁なりと浮ふへし　提婆か悪も

観音の慈悲繋持ら愚癡をも文
殊乃智恵あくといふも善あり
煩悩といふも菩提也喜捨もと
植木よりあらん明鏡又臺よりあし
本来一物なき時ハ仏も衆生も
隔なしとよりをちの凡夫を救ん
為の方便のふかき誓の願なれハ逆

縁なりと浮かへしと慈悲よりをハ誠よ
何と伝る非人なりとて僧ハ知らへと
地よつまく三度礼しぬるハ我ハ洗
時ちゝをとは経たりつきの寺とら母も撫
樂れうなうへうらあらかあらずね
何うへ告しかるへき云つゝ紫僧
のぎうけやく掬むくとハつ成

人こそしらね業平の　シテ詞 はつかしなから
名を名乗り候へし　これは出羽の郡司
小野の良実かむすめ小野の小町かなれる
はてにて候なり　痛はしやな
小町はいにしへは婬女にて花の像
輝き桂の眉墨青うして白粉を
絶さす羅綾の衣多くして桂殿の
間にあまりしそかし　哥を詠詩を
作り　酔をすゝむる盃は漢月
袖に静かなり　まことに優なる有様の
いつ其程に引かへて
霜蓬をいたゝき嬋娟たりし両鬢
も膚にかしけて墨乱れ
宛転たりし双蛾も遠山の色を失ふ百

年まだうら珍たらねつも、かごろお
みやびたる有明の歌をうつしき秋がほ
首よかきたるかろうよハめや咏めせを入
たるそ けふも命ハありかねあひの
うへをたきさんと大豆のかまいひを
俵に入て持たるよ ねよわたへる俵よハ
いつよのわかつきる哀あり ひらつよ道

あるうつかよハ白黒の田鳥子あつと
ばまきのん要い やぶれ笠 面つりをも
かくさねハ まして霜を雨露 凌
をるあまし もとはづかしき狀も袖もあらハ
うそれしてハ路頭よさすらひ住来の人よ
あとをしぐらひえぬ時ハ悪心ざまし狂乱れ
心つきて聲かハりきしかりひ あつよ物

たゞ今の御僧なふ　何ぞ　小町
かもとへ通ふよなふ　汝こそ小町よ
何とて現なき事をば申ぞ　いや
小町と云人はあまりに色ふかくてあ
なたの玉章こなたの文かきくれて降
五月雨の空ことなりとも一度の返事も
なふて百年になるが報ひて今

人恋しやあら人恋しや　人恋ひ
とはいかにことにはめでたき老のつき添
て昔ぞ　小町に心をかけし人は多き
中にも殊に思ひ深草の四位の少将の
恨みの数のめぐりきて車の榻に
通ひし日は何時ぞ夕暮月こそ友よ
通路の関守はありともとまるまじや

いでたち　浄衣にて候ひしか
浄衣の袴かいとつてたてゑぼしを
かざをり狩衣の袖をうちかづいて
人め忍ぶの通路の月にも行やみにも
雨の夜も風の夜も木の葉の時
雨雪ふかし　軒乃玉水とく
と行てハ帰りかへりてハゆきの一夜

二夜三夜四夜七夜八夜九夜豊
乃明の節會にもあはでぞかよふ
鶏の時をもかへず暁の榻乃
はしかき百夜まてとかよひいて九
十九夜になりたりあら苦し
目まひや胸くるしやと悲しみて
一夜をまたで死したりし深草乃

かれの其怨念うつきたひてば猶
また叔父ハ猶もゆるらや　見しよつきそ
もとほの世をだねうつうまこと成きる
げと塔しかさりて黄金乃まへ
こまやりよば花を仏よ手向つばより
のみうよいふよく

弁慶

弁　今日思ひつる様くはしく語をいつ
と定め置　か様よいハ者ニ西塔の
傍よ住居もちる武蔵坊弁慶みそれハ
掛も我君判官殿ハ頼朝乃御代友
やうして平家を亡ほし給ひ御兄
弟乃はや中日月のことくあふぐへきを

げにやひとびとあさき者の讒言よりは中
たがひぬれはかへすも口惜しき次第な
て候然れども我君親兄の礼をたも
ち給ひ一まづ都をば開きあつて西
国の方へ御下向ありは身にあやまり
なき通りをは歎き申さるへき為に今夜をこめて
め淀よりは船にて津乃国尼が崎

大物の浦へと急ぎ候

サシ
抑ハ文治の初
めつ方頼朝義経不会の由既に落
居し力なく
判官
判官都を遠近の道
せくならぬ其さきに西国の方へと
立衆同
心ざしまだ夜深くも雲井の月
出づるも惜しき都の名残一年平家
追討の都出には引きかへて唯十余人

すごゝとさもうとからぬとも舟の

下歌 上り下るや雲水の身ハ定めなき習ひかな

上歌 世の中の人は何とも石清水すむ

濁るをも神ぞしるらんと高き御影を伏拝み

行けば程なく旅心潮も浪も

尼崎大物の浦に着にけり

ワキ詞 御急ぎ候程に是ハはや大物の浦に着

某ハ此所に知る者の候間宿の

事を申付うずるにて候いかに此屋

のあるじの渡り候か 狂言 誰にて渡り候ぞ

ワキ いやむさしにて候 狂言 武蔵殿ハ何の為の

御出候 ワキ さん候我君を是迄御供

申て候御宿を申候へ 狂言 さらバ奥のまへ

御通り候へば扨御心乃中ハ御心安く

思召され候へ　ワキ「恐れながら申上げ候へども隠れ多き申事にて候へ共正しく静は御供と見えて候今の折節何とやらん似合ぬ様に候へば御心つかれ是よりは京へ御返しあれかしと存候　判官「ともかくも弁慶はからひ候へ　ワキ「畏て候さらば静の御宿へ参りて申さばやと存候いかに此屋の内に静の渡候か君よりの御使に武蔵が参りて候　シテ「何武蔵殿とは思ひよらずや何のための御使にて候ぞ　ワキ「さん候只今参る事余の儀にあらず我君の御諚には是迄の御志返す返すも神妙に思召され候へ共是より何とやらん似合ぬ様に候へば是より都へ御

ゆかりあれとのたまひて候　シテ「是ハ思ひ
もよらぬ仰哉何しても偽し給ひ候
しよ頼ても頼みなき人の心なるらん
何となや仰　ワキ「扨御存事とせる
あまりに仰候へき　シテ「言ふからは偽り君
は大かたよ申はつて留主にはへし　ワキ「あら
ことくしやはかなはとゆかり有所要

みつし　シテ「継信忠信兄弟は武
蔵殿のはなちえひと思召は猶よかつらん
しまり直に御ぞるゝやとかへし　ワキ「去ん
とも角もみつから度へ汝しまりこそめでたよ
まよはぬ都の内妻子なく　判官「いつよ敷奉式
度思ひも落人と成落行る処に
是迄遁来たる心かけしさひくも

さんぬるうありけりあかつかりく
の波濤をしのぎ下らん事無益也
ろしかも此度は都より下りし時節を
待得て掛る誠に我君の讒言により
うやまし（？）あさましき敵を恨みつる
身のうちよりぞ悔しくも面目
なう祐経いやしき者は苦しかりし

唯人口をぞ思ひ有けり心替るとあ
こほしめしぞ涙を流しけり
上詞
いやとよ角に牧ありぬるよは恨みも
あらそれこそ是ハ母路の門出なるに
内も静を留め給ひかたし涙とあ
うかのての御縁て替りし縁り
しるも定めあやむやむかまきより

まさりて惜き命かな君に二度逢んと
ぞ思ふ行末 判官 めでよ静
に酒をすゝめ候へ ワキ 畏て候ふ是
は門出の行末千代ぞと菊の盃静
にこそはすゝめけれ シテ 童も君の御わか
れやる方なさにかきくれて涙にむ
せぶ計なり ワキ いや〳〵これは苦し

からぬ旅の船路の門出の和歌只
一さしとすゝむれば シテ上 其時静は立上
り時の調子をとりあへず渡口の郵船は
風静まつて出づ 地 波頭の謫所は
日晴て見ゆ 是よ思ほしれん名残
立まふべくもあらぬ身の袖うちふる
も恥かしや 伝へ聞陶朱公は勾践を

ともなひて会稽山に籠りゐて種々の
智略をめくらし終に呉王を亡して
勾践の本意をとけしとかや然るに
勾践ハ二度世をとり会稽の恥を
すゝきしも陶朱功をなすとかやされハ
越乃臣下にてまつりことを身に任せ
功名とミ貴く心乃ことくなるへきを

功成名とけて身しりそくハ天乃道
と心得て小船に棹さして五湖の煙濤を
楽しむかゝる例も有明
の月乃都をふり捨て西海の波
濤に赴き御身のとかのなき由を歎き
給ハゝ頼朝も終にハなひく青柳
の枝をつらぬる御契りなとかハ朽し果

はへつき たゞ頼め 唯頼めしめ
ぢが原のさしもくさ 我世中よ
あらん限りハ かくする詠乃偽あらハ
かゝる詠のいつはりなくハ頼て代よ
出舟乃舟子共や ともつなをとく
とくとくはやめをハ判官も揺れ
の宿りを出給へハ 静ハあとく

烏帽子直垂捨て涙にむせふ御別
みるめも哀れなりけり 静の心中
察しやりては 弁慶舟子を出けまうる
ワキ みなくハいかに何れも 何よりみなくそ
君よりの仰には 今日ハ海上あらくは
猶よは逗留と仰出されては ワキ 何とは
逗留とはや ワキ なんは ワキ 是ハ推量

中よ静よふ猪とは情こもつらくば
逗留しおはゞ是は思案ずては防ぐらん
べう此比才もなく加様の事は御運も
つきさるとおはゞ其上一年後迄福
鳴をとり時は我身もれ風にに思はれ
舟をとり平家をとほり給ふ
べうをつく同下そかし急ぎ舟をと出

すへし 今は是は理の也げにも
数とふ波の 立りちさつ舟子共
えやしとふ塩よづきて舟をとう
出ぎる 意呼や風かさつくばお
の武庫山おろし弓手のは嶽より吹
おろ風よ此は舟れ陸地よつくつさ
様も皆く心中よ御祈念はへ

いかに武蔵殿此は舟にはあやかしかつきて候

ワキ　あゝ暫く左様の事をは船中にてハ申さぬ事にて候　あら不思議や海上を見れば西国にて亡びし平家の一門各々浮かひ出たるぞやかゝる時節を窺ひて恨をなすも理なり

判官　いかに弁慶

ワキ　御前に

判官　今更驚くへからすたとひ悪霊恨をなすとも何事の有へきそ悪逆無道のそのつもり神明仏陀の冥感に背き天命に沈みし平家の一類主上を始め奉り一門の月卿雲霞のことく浪に浮ひて見えたるぞや

抑是ハ桓武天皇九代の後胤平の知盛幽霊あら珍しやいかに義経思ひもよらぬ

浦波の声をしるべに出舟の
知盛が沈みし其有様に又義経
をも海に沈めんと夕浪に浮める長
刀取直し巴波の紋あたりを払ひ
潮を蹴立て悪風を吹かけ眼もくらみ
心も乱れて前後をばうずる計
なり　其時義経少もさはがず

うち物抜持うつゝの人にむかふごとく
言葉をかはし戦ひ給へば弁慶おし
隔てうち物わざにてかなふまじと
数珠さら／＼と押もんで東方降三世南
方軍荼利夜叉西方大威徳北方金剛
夜叉明王中央大聖不動明王のさくに
かけていのりいのられ悪霊次第に遠

遠ざかれハ弁慶舟子に力を合せお
船を漕のきみぎはによすれハ猶怨
霊ハ慕ひ来るを追払ひ祈り
のけ又引塩にゆられ流れ又引
塩にゆられきなかれきて跡白浪とぞ
なりにける

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛